

「なるほど」がちりばめられた総合英語

森田哲生



本校の高校1年生では、文法テキストとして『ジーニアス総合英語 Lesson27』と『ジーニアス総合英語』を使用しています。語法・文法の説明が詳しい『ジーニアス英和辞典』を勧めているので、併せて新しく刊行された『ジーニアス総合英語』を選択しました。授業では主にいわゆる「厚物」のジーニアス総合英語を使って解説をしています。この1学期に「第5章 助動詞」まで終わりました。生徒には授業までに指定された範囲を読んでくることを宿題とし、授業内で解説・補足し、復習として問題演習を行うというオーソドックスな展開をしています。週2単位の授業のため、教師が話したり、ここには興味深いことが書いてあるから読んでおきなさいと紹介（飛ば）したりしています。

実際に使用して印象に残るのが、やはり語法解説とその具体的説明の量であると思います。文法ルールを一通り説明した後、「実際にはこう使うのがふつう」という補足がコラム以外の解説にも多く出てきます。自分が高校生の時に見ていた参考書にはそこまでの解説はなく（記憶がないかもしれませんが）、英語を教えるようになってから知ったような、でも高校生の時に知っていたらもっと楽しかったであろう解説から、また英語を苦手とするからこそその単純な疑問に対する解説まで様々です。この点が、英語を苦手とする生徒と得意とする生徒双方に、「そうなんだ」「なるほど」という関心を引くポイントになっているのだと思います。コラムや「もっとくわしく」などは、紹介するだけに留まることも多かったです

が、飛ばすからと言って重要でないわけではないと前置くと、生徒は結構勉強してきている様子です。決して英語を得意とする生徒が特別に多いわけではないと思いますが、それぞれのレベルの生徒の関心を引くのだと思いました。

今改めてそのポイントに付箋をつけながら再読すると、今まで見てきた参考書ではあまり見られない点が、これまでに40以上ありました。以下、第4章までで、他では見ない「そうなんだ」「なるほど」などと思わせる箇所をいくつか紹介させていただきます。

学習者に「より自然な英語」を推奨する

「第4章 完了形」のp.99の注意でアメリカ英語では have gone to ～が「～に行ったことがある」という「経験」の意味で使われることがあるが、イギリス英語では誤りとされるので、この意味では使わない方がよいという記述があります。「使わない方がよい」とまで理由をつけて書かれていることは少ないように思います。

また、同章のp.100の注意では× I've been in Tokyo since six months ago. とするのは避けた方がよく、I've been in Tokyo for six months. が自然な英語であると書かれてあります。

理屈ではあり得るけど不自然で、どうすると自然なのかまで挙げられているのは学習していて印象に残ります。

「そうなんだ」「なるほど」と思わせる

「第1章 文の種類」のp.41のコラム「英語の

発想」では、どんな命令文でも please がつけられるわけではなく、相手がその行動をすることで話し手が利益を受けたり、話し手が心を込めて相手に行動を促したりするときに使われるのが基本で、× Please go straight and turn left at that corner. のような道案内の指示の場合は please を使わないと書かれています。そして、日本語の「～してください」は丁寧な言い方としてさまざまな場面で使えるが、please には使える条件があるので、やみくもに please を使わないように注意喚起がされています。please をつけても「命令」は「命令」。そして私自身もやみくもに please を使ってきたように思います。

似た表現の違いをしっかり解説

「第2章 動詞と文型」の pp.60-61にある「もっとくわしく」では Can you bring a glass of water to me? (A) / Can you ... for me? (B)の違いについて、(A)は to が「到着点」を表すので、水を飲むのは「私」とは限らない一方で、(B)は for が「利益」を表すので、水を飲むのは「私」である、と解説されています。to 型の動詞とか for 型の動詞といっても、日本語にしてしまうと区別がつきにくい生徒が多かったですが、この解説ですっきりしていたように思います。

また、「第3章 時制」の p.86にあるコラム「比べよう！」では ① I hear... / ② I heard ... / ③ I've heard ... について、①～③はほぼ同じ意味ですが、厳密には違いがあり、①は「…とうわさに聞いている」(People say ...), ②は「…と人から聞いた」(Someone told me ...), ③は「…だと人から聞いたところだ」という意味で、話し手が従属節の情報を人から聞いたばかりの時に使うと説明しています。

似た例をもう一つ紹介すると、「第4章 完了形」の p.97「比べよう！」でも ① I forgot. / ② I have forgotten. / ③ I forget. について、いずれも「忘れた」というときの表現ですが、知っている

はずのことや頼まれていたことを忘れた場合は①を使い、忘れてしまって思い出せない場合は②か③を使うと書かれています。

「そう聞いている」「忘れている」は確かに「今もそうである」のだから現在形でも表せるのが生徒たちには意外なようでした。

生徒が間違いやすいところの解説も充実

「第1章 文の種類」の p.32の注意で否定疑問文は否定の意味を強調する場合や堅い文では Is she not your sister? / Did you not go to school yesterday? のようにも言えるが× Is not she ...? や× Did not you ...? とは言えないことが書かれています。

否定疑問を短縮形にしない記述は他ではあまり見ませんが、和文英訳や整序問題での指導に有効かと思います。

また、「第4章 完了形」の p.110のコラム「比べよう！」では ① By the end of the school year, we will finish the entire textbook. ② By ..., we will have finished the entire textbook. は「学年末までにテキストをすべて終えてしまいます。」というほぼ同じ意味を表すが、②の未来完了形は堅く、日常表現としては①の〈will + 動詞の原形〉がふつうで、「完了」の意味を強調したい場合には②を使うこともあると解説されています。

過去完了を勉強すると過去表現は何でも過去完了になり、未来完了を勉強すると未来表現は何でも未来完了にしたくなる衝動が抑えられ、違いも分かりました。.

* * *

続く第5章だけでも上記分以上の「なるほど」がありました。次の学期にも、受け持つ現在の生徒たちにも楽しみにしてほしいと思うとともに、高校英語既習者がこの本を読むと、より味が出て、理解の深まりや新しい気付きと、実際使うときに少し自信を得られるように思います。

(もりた てつお・日本大学第二高等学校教諭)